
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 373 号

—環境・農業・食べ物など情報の交流誌—

2014.12.12（金）発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

<http://www.yamazaki-i.org>

*****発行部数 1040 部*****

□ 目 次 □-----

<巻頭言> 将来世代を考えた一票を 小泉浩郎

<第 150 回 定例研究会 のご案内>

■テーマ：自然災害を考える新たな視点

日時：2014 年 12 月 20 日（土）13：30～17：00

<山崎農業研究所総会記念フォーラム（速報）>

■テーマ：山崎記念農業賞受賞者に学ぶ（2014 年 7 月 26 日）

4. 耕してこそ農業.....福島県有機農業ネットワーク理事・大河原 海氏

<お知らせ 1> 山崎農研編「平成のマドンナ」シリーズ No.8 完成しました

<お知らせ 2> 山崎農業研究所所報『耕 No.132』発行されました

<編集後記> “買弁”という言葉にたじろぎつつ

<巻頭言> 将来世代を考えた一票を

「景気回復、この道しかない」「景気は確実によくなっている」。それが本
当なら、任期 2 年を残してなぜ解散したのか。2 年前の総選挙で国民は、苦心の
1 票を投じて 4 年間の国の経営を託したのだ。それを何の大義も無く道半ばで放
棄とは、国民への裏切りである。

なぜいまか、何のためか。わけの分からない解散だが、この 2 年間、本来、
国民の信を問うべき重要な問題はいくつもあった。国論を二分し国会議事堂を
包囲するデモが何度も繰り返された。だが、何れも議論半ば拙速のまま決めら
れてきた。与野党を含め永田町のそのテイタラクに国民の鬱憤は蔓延し一部は
あきらめへと沈積しつつあった。その意味では、よい機会である。この選挙は
アベノミクスを「国民に信を問う」など小さい話ではない。国民の議論を二分
し国のあり方を左右する諸懸案を国民から「各党、各立候補者に信念を問う」

選挙である。

この2年間の政権運営で、この国の将来を決定付ける懸案事項が次々提案された。「この道しかない」と硬直的な論理で国のあり方を誤ってはならない。提案に対する反対や疑問、提案があつて国民の判断が生まれる。この総選挙で問うべきテーマは、たとえば以下の諸点である。

(1)戦後レジームからの脱却：総括なしの切捨てか、(2)アベノミクス：貧富の格差拡大か、(3)集団的自衛権行使容認：戦争のできる国への道か、(4)特定秘密保護法：国民の知ること、行動することの制限か、(5)原発再開：被災救済未解決と多くの疑問が残されたままの再開でよいか、(6)TPP参加：国の主権を脅かす恐れはないか、(8)農業改革：家族農業の切捨てと風土に刻まれた歴史と文化の喪失か、(9)政治手法：多数を力にした強引ないわゆる「決められる政治」でよいかなどである。

この総選挙で少なくとも今後4年間の政権運営が約束され、一連の懸案事項の骨格が決定的になる。将来世代のこの国のあり方が決まる歴史的選挙といっても良い。正に「清き一票」を行使し、今を生きる現世代の責任を果たす必要がある。

小泉浩郎

山崎農業研究所所長

yamazaki@yamazaki-i.org

<第150回 定例研究会 (12/20) のご案内>

■テーマ：自然災害を考える新たな視点

広島市の土石流災害では多数の住民が犠牲となった。この災害は、無計画な都市開発がもたらした人災の可能性も少なくないものと考えられ、今後とも、気候変動がもたらす災害が増える可能性が高い。

災害は、住宅地に近接した災害危険区域だけでなく発生し、ダムやため池、砂防ダムなどのインフラの被害が多発する可能性もある。今回は、こうした自然災害について2名の方の報告を基に自然災害に対する考え方等についての議論を深める。

◆日時：12月20日（土）13：30～17：00

◆場所：NTC コンサルタンツ（株）会議室
東京都中野区中野区本町 1-32-2 ハーモニータワー20F
Tel 03-5333-2051 Fax 03-5333-2055

◆話題提供と質疑応答（13：30～17：00）

1. 豪雨災害に備える自主防災力向上を目指した地域活動の展開
――甲府市帯那地区での手作り防災マップ WS から地区警戒
雨量基準の策定まで

重岡 徹氏

（独）農村工学研究所主任研究員）

2. 溪流保護から見る土石流災害と砂防問題

田口康夫氏

NPO 法人 溪流保護ネットワーク・砂防ダムを考える代表

※参加費：500 円

◆意見交流会&忘年会（17：30～19：30）

話題提供者を交えての自由な意見交換会

※参加費：4000 円

※参加申し込み：参加希望者は事前に下記へご連絡下さい。

会員外の参加も歓迎いたします。TEL：03-5333-2051（益永）

e-Mail：y.masunaga@ntc-c.co.jp

<山崎農業研究所総会記念フォーラム（速報）>

日時：2014年7月26日（土）13:00～17:00

場所：東京都新宿2丁目19-1 ビッグスビル B21 会議室

テーマ：山崎記念農業賞受賞者に学ぶ

1. 経過と評価.....事務局長・小泉浩郎氏

2. 在来品種を磨く

(第 33 回 (2008 年) 受賞) 野口種苗研究所代表・野口 勲氏

3. 家族農業経営を守る

(第 13 回 (1987 年) 受賞) 元船橋農産物物産センター・斉藤敏之氏

4. 耕してこそ農業

(第 36 回 (2012 年) 受賞) 福島県有機農業ネットワーク理事・大河原 海氏

4. 耕してこそ農業.....福島県有機農業ネットワーク理事・大河原 海氏

福島にも若い農業者はいる。有機農業ネットワークである。今、震災後、放射能汚染マップなど作成して、消費者と生産者の溝を埋める努力をしている。

私は福島県の中通り田村市で生まれたが、沖縄大学で EM 菌の研究をやっていた。3・11 に遭遇して、今後の農業に不安を感じ、放射能に負けたくないという気で福島に戻った。家は有機農業をやっていたが、その消費者の 2/3 が去ってしまった。家族で株式会社を立てて、放射能測定器を買って、厳しい基準の下で安全・安心な「有機」の販売をした。

2012 年から本格的なハウスでミニトマトを作った。「有機」なので高く売れた。近くに行政が放棄した果樹園があった。これを機械も無料で借りてリンゴとモモの栽培を始めた。そして販売所「えすぺり」(エスペラント語：希望)を始めた。トマトも販売直前に県産農産物出荷停止を受けた。インターネットやフェイスブックを利用して宣伝し、販売網を広げた。でも半分は売れ残った。モモもこの販売網を利用している。リンゴも今年から販売を始める予定である。

現在考えている販売拡大計画は、フェイスブックの利用とグリーン・ツーリズムである。民宿を設けて、ファーム・ステイも計画している。多くの人に農業の楽しさを伝えたい。

有機農業ネットワークでは、「オーガニック・フェスタ 2013 年 in 福島」イベントがあった。バスツアーを含め 3000 人くらい集まった。しかし時期的に 11 月であったため出し物が少なかった。今後の検討が要る。これと同じようなフェスタを 5 県協力で相馬市で今年 3 月に行った。パネルディスカッションも行った。今年も 8 月に「オーガニック・フェスタ 2014 年 in 福島」を行う。

このようなイベントを通して「生産者と消費者」の交流の場を作っている。今後もこれに力を入れたい。この他「水辺の生きもの」や「クイズ」ものなど多様な奇抜な催しも考えている。東京下北沢、荒川区役所に販売網を拡げつつある。福島県産として全国に福島県産、有機農業をPRしている。今は助成金で運営されているが、はやく独立したい。

(文責：安富・田口)

<お知らせ 1> 山崎農研編「平成のマドンナ」シリーズ No.8 完成しました

山崎農研編集「平成のマドンナ」シリーズ No.8(B5版・30ページ)が完成しました。既発行分も含め、電子版あるいは冊子で頒布しています。送料込み500円です。ご希望の方は yamazaki@yamazaki-i.org までご連絡ください。

(新刊)

No.8 家族経営協定でいきいき人生にトライ

栃木県那須塩原市

酪農・教育ファーム・レストラン 人見みゆ子さん

(阿久津加居聞き書き)

(既刊)

No.1 都市近郊に「オアシス牧場」を

埼玉県上尾市 榎本美津子さん (小井川敏子聞き書き)

No.2 世羅高原のそよ風になりたい

広島県世羅町 井上幸枝さん (後由美子聞き書き)

No.3 むらにまちにこどもたちにふるさとの味を伝えたい

鳥取県鳥取市 西山徳枝さん (小泉浩郎聞き書き)

No.4 働きやすい作業環境の改善

徳島県 藍住地区のお母さん達 (小林徳子聞き書き)

No.5 「奥久慈の味」から広がる出会い

茨城県大子町 齊藤キヌ子さん (臼井雅子聞き書き)

No.6 デパートに進出した農村女性

栃木県宇都宮市 アグリランドシティショップ (阿久津加居聞き書き)

No.7 貧しさに学びこころ豊かに生きる

群馬県嬬恋村 丸山みち子 (丸山みち子著)

No.8 家族経営協定でいきいき人生にトライ

栃木県那須塩原市 人見きみ子さん（阿久津加居聞き書き）
No.9 （近刊） 月に手が届く山間農家に嫁いで
高知県土佐町 和田計美さん

<お知らせ 2> 山崎農業研究所所報『耕 No.132』発行されました

山崎農業研究所所報『耕 No.133』が発行されました。
ご希望の方には雑誌を頒布（有料：1,000 円）いたします。

yamazaki@yamazaki-i.org

までご連絡ください。

■山崎農業研究所 40 周年記念

山崎農業研究所を支える力— 40 年を振り返って◎安富六郎

〈山崎イズムを現代に問う〉

- ・ 研究活動における山崎イズム◎田渕俊雄
- ・ 研究をもっと技術に生かすために◎多田 敦
- ・ 山崎不二夫先生の全人間的な研究実践に学ぶ◎熊澤喜久雄
- ・ コンサルタントと研究所◎横澤 誠

〈研究所活動をめぐって〉

- ・ 現地に学び現地とともに◎小泉浩郎
- ・ 定例研究会について◎石川秀勇
- ・ 「耕」「電子耕」単行本を通じた社会への発信◎田口 均
- ・ 研究所のこれからを考える◎渡邊 博

〈山崎（記念）農業賞受賞者はいま〉

- ・ 丸藤政吉〈第 5 回・1979 年〉現場と共に＝「農村通信」創刊 800 号
- ・ 小林芳正〈第 8 回・1982 年〉ふるさとへの想い—いまも消えることなく
- ・ 古野隆雄・久美子〈第 21 回・1996 年〉合鴨家族の 20 年
—進化し続ける合鴨水稲同時作
- ・ 鋸谷 茂〈第 29 回・2004 年〉自然の摂理に基づいた林業技術を現場で実践
- ・ 榎本牧場〈第 30 回・2005 年〉都市近郊で酪農の 6 次化をさらに展開
- ・ 大張物産センターなんでもや〈第 32 回・2007 年〉
地区民が求める「なんでもや」であり続けること

- ・野口種苗研究所・野口 勲〈第 33 回・2008 年〉
自然回帰の時代のなかで固定種の普及につとめる
- ・NPO 法人 福島県有機農業ネットワーク〈第 36 回・2012 年〉
福島の有機農業再興のために

■第 147 定例研究会 愛郷 vs 愛国— TPP 問題へのもう一つの視座◎宇根 豊
〈書評〉宇根 豊 著『百姓学宣言』／徳永光俊

<編集後記> “買弁”という言葉にたじろぎつつ

最近のお気に入りサイトのひとつに、思想家で武道家でもある内田樹氏の「内田樹の研究室」がある。社会のもろもろの事象への、厳しいまなざしと鋭い論理による批評を読む度に背筋がスッと伸びる。最新記事では、12月14日の衆議院選を前に最近の政治状況、安倍政権とはなにかについて論じている。

共同通信のインタビュー

http://blog.tatsuru.com/2014/12/05_0858.php

内田氏は、安倍政権は大きな誤り、大きな勘違いをしているという。

「安倍政権はグローバル企業の収益増大のことしか考えていない。そのためには『国家は株式会社のように運営されるべきだ』と信じている。特定秘密保護法の制定も解釈改憲もその文脈で理解されると思う。」

「政策の適否を決定する『マーケット』は株式会社にはあるが、国家にはない。国家は 50 年 100 年なり後になって『健全に機能している』ときに、『今から 50 年前、100 年前に選択された政策は適切だった』と事後的に確認しうるのみである。国家には入力した瞬間に、タイムラグなしにその適否判断を下すような便利な『マーケット』は存在しない。」

内田氏は、そもそもの役割がちがう「国家」と「株式会社」が安倍政権では混同されていると痛烈に批判するのだ。そして、特定秘密保護法と集団自衛権の行使の憲法解釈の変更によって得る国益は何もないとし、“買弁”という言葉を用いて次のように断じる。

「この二つの対米『譲歩』によって日本が得る国益はなにもない。ただ民主制の土台が崩され、70年の平和主義の蓄積が失われただけである。それと引き替えに、政治家たちは権力と財貨を、官僚たちは行政府への権限集中を、財界人たちは企業の収益増大を手に入れた。彼らはそれぞれ日本の国益をアメリカに安値で売り払った代償に、個人の利益を手に入れようとしたのである。それはかつて植民地において宗主国におもねって、自国の国益を犠牲に供して、自己利益をはかった『買弁』のふるまいに酷似してきている。」

「現代日本社会では『対米従属的である人間の方がそうでない人間よりも政官財メディアなどの世界でも出世できる仕組み』が完成してしまった。だから、おのれ一身の立身出世をめざす人間は、ほとんど自動的に対米従属のしかたを身につけ、『買弁』的メンタリティを内面化してゆく。」

“買弁”という言葉のもつ鋭さに、「そこまで言わなくても…」とも思いつつ、「いや、問題の本質をつきつめていけばそう言わざるをえない」と思い直す自分があるのに気づく。

「今の日本で、わが国が米国の従属国だということをリアルに認識しているのは沖縄だけだと思う。その沖縄知事選で、基地反対を掲げて勝った事実は大きい。今回の選挙の真の争点は『対米従属を通じての対米自立』という国家戦略をこれからもまだ続けてゆくのか、それともそれとは別の道を探るのか、という外交戦略の選択であり、『国家の株式会社化』という独裁制の進行をこのまま手をつかねて許すのかという政体の選択である。『アベノミクス選挙』などというのは問題の本質を隠蔽するための偽りの争点設定でしかない。」

という言葉でこのインタビューはしめくくられる。もちろん、内田氏の言説に対して、それは言い過ぎだとか、不愉快である、といった感想をもつ人もいるだろう。しかし、と思うのだ。なぜ言い過ぎだと思うのか、なぜ不愉快に感じるのか、そう思う、そう感じる自分と対話することは、選挙前のいまだからこそ大事なのではないか、と。ぜひ、記事全文を読まれることをおすすめしたい。

2014年12月11日

山崎農業研究所会員・田口 均

yamazaki@yamazaki-i.org

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売
『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』
(発売：2008/11 定価：1,575 円)

http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/

たくさんのお書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

◎辻信一さん (文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授)
グローバルの次は何? ～卒業するゼミ生諸君へ

<http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html>

◎戒谷徹也さん (大地を守る会)

ブログ：大地を守る会のエビちゃん日記 “あんしんはしんどい”

「自給率」の前に、「自給」の意味を

<http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/>

◎吉田太郎さん (長野県農業大学校教授、執筆者)

キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました

http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182

◎関良基さん (拓殖大学政経学部)

ブログ：代替案 書評：『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』

<http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0>

◎大内正伸さん (イラストレーター・ライター)

ブログ：神流アトリエ日記 (3) 「書評『自給再考』」

<http://sun.ap.teacup.com/applet/tamarin/20081204/archive>

◎ブログ：本に溺りたい グローバリゼーションの次は何か

<http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html>

◎森川辰夫さん

NPO 法人 農と人とくらし研究センター／資料情報

<http://www.rirel.jp/shiryo.htm>

◎日本農業新聞／書評

(2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優)

<http://yamazaki-i.org/>

(画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい)

◎小谷敏さん (大妻女子大学)

日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ (2009/01/31)

<http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219>

◎白崎一裕さん ((株) 共に生きるために)

月刊とちぎV ネットボランティア情報 vol.158／しみん文庫

<http://yamazaki-i.org/>

(画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい)

◎塩見直紀さん(半農半X研究所、執筆者)

ブログ:半農半Xという生き方〜スローレボリューションでいこう!

立国集。

<http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/>

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名(見出し)を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末にURLを。

5、JIS X0208 規格外の文字(機種依存文字)のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

次回 374号の締め切りは12月22日、発行は12月25日の予定です。

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第373号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://archive.mag2.com/0000014872/index.html>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み/解除案内

<http://www.yamazaki-i.org>

2014.12.12(金)発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:yamazaki@yamazaki-i.org>

***** ここまで『電子耕』 *****